

トレセン学園って普通の
学校じゃなかったん
ですか！？

普通のモブ娘

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ウマ娘専用の学校？え!?専用ってことはウマ娘はそこに入学できないとダメ…ってコト!?

目次

トレセン学園の問題児	1
問題児とトレーナー（候補）達	8
問題児とトレーナー（真）	15
問題児と模擬レースの約束（強制）	23
シンボリルドルフ	31
問題児の敗北	40
問題児とスピカ	47
トワイライトアサヒ	56

トレセン学園の問題児



とあるウマ娘は激怒した。必ず、あの邪知暴虐のトレーナーを除かねばならぬと決意した。ウマ娘には政治……どころか二次方程式もわからぬ。英語もできぬ。歴史もできぬ。このウマ娘はバ鹿である。

そして、このウマ娘、トレーニングが嫌いである。

「やだやだやだああああああああああああ!!!」

走ること自体は好きであったし、朝に軽くランニングするとか、体育の授業とかはむしろ率先して取り組むタイプではあるが、勝つために厳しい練習を乗り越え、勝利を目指すようなスポ根は大の苦手であった。

「駄々こねてもダメだ。ほら練習行くぞ」

無知なウマ娘はトレセン学園をウマ娘が『通わなければならぬ』学校だと勘違いして入学した。つまりレースに出るとか速くなりたいとかではなくウマ娘はトレセン学園に入らないと最終学歴が小卒になってしまうのだと思っていたのだ。

「騙されないよー！ どうせ練習という名の拷問なんだ！」

そのためレースに意欲的ではなく放課後も遊びまくっていた。他のウマ娘達の練習風景を遠目に見ながら部活動が盛んな学校なんだなと呑気に思っていたことは内緒である。

「何言ってるんだ。俺も一緒に付き合ってるやっつてるだろ？ ヒトが耐えられるメニューをウマ娘である君が耐えられないわけがないだろう」

つまりこのバ鹿はトウインクルシリーズを部活の公式大会だと思っていたのだった。「トレナーがおかしいだけだよおお！ ダメだ、殺される！ たづなさあん！ ルドルフウウ！！」

しかし、バ鹿にとつては不幸なことにウマ娘には才能があった。毎朝のランニングの成果なのか、はたまた天性のものなのか、それは本人すらもわかっていないが、中央のトレセン学園に入学できてしまっていること自体がその証明と言えるだろう。

〜1か月前〜

トレセン学園理事長室。ここでは今まさに問題児に対する議論が行われていた。

「疑問！ 中等部からホープとして期待されていたトワイライトアサヒは何故未だ出走登録をしていない！」

「それが、そういうスポ根は向いてないの一点張りです……」

「むう……しかしだな、同時期に入学したシンボリドルフも7冠達成という快挙を成し遂げ、前線を退いている状態。流石にもう色々と限界ではないか？」

お察しの通り、先のおバ鹿なウマ娘のことである。名前はトワイライトアサヒ。シンボリドルフと同時期に入学しながら、模擬レースに1回出たきりろくに走っていない、ゴールドシップとは別の路線でトレセン学園きつての問題児である。

「それはつまり……」

「走らなければ退学措置も視野に入る！ 聞けばテストも常にギリギリ、普通の高校なら留年しているレベルと聞くしな！」

「………本音は」

「退学なんぞ以ての外である！ 彼女の足を埋もれさせるのは実に惜しい……しかし！ 1回崖っぷちまで追い詰めないといつまで経つても走らんだろう！ 模擬レースで見せたあの走り……必ず我がトレセン学園の宝となる！」

「では成績不振で退学になる可能性が高いからレースに出てくれ……という形でよろしいでしょうか？」

「うむー！トワイライトアサヒには直々に理事長室に来てもらい、私から話そう！その方がより危機感を持ってくれるだろうからな！ではたづな、今すぐ校内放送だ！」
「今は授業中です……」



「ごっはん！ごっはん！ごっはっんー！」

いやあ、授業中はもう眠過ぎてヤバかったなあ。一瞬意識飛んじやったもんね。あー、でも途中で先生がブレイクダンスし始めたのはビビったね！最後には羽を生やして窓から飛んでっっちゃったし。

「やつほー！遊びに来たよー！」

「やあアサヒ。その手に持つてる弁当箱を見るに、一緒に昼食をといたところかな？」
「そゆことー！今日は手作り弁当なんだあ。食堂もいいけどたまには花嫁修業もしないとねー！」

「先輩。生徒会室は遊び場ではないのですが」

「まあまあ、私達も食べようかと言っていたところじゃないか」

「会長は甘いんです！」

エアグルーヴは相変わらず厳しいなあ。最初は凄いルドルフと同じくらいの勢いで尊敬されてる感あつたのに、いつの間にか世話の焼ける子どもみたいな感じになつてたんだよなあ。そりゃルドルフと同じくらいしつかりしてるとは言わないけどさー。

「なんですか。その物言いたげな目は……」

「なんでもないですよー！んじゃご飯食べようよ！」

「とりあえず食堂に移動しようか。私とエアグルーヴは弁当ではないからね」

その言葉を待っていたアー……このカバン重かつたんだから！

「ふっふっふ……実はねーみんなの分も作ってきたんだよー！」

「じ、重箱……」

「これは……相変わらず凄いな」

今回は相当張り切つたからね!!不本意にもおバ鹿と思われがちな私だけど、料理はすぐに嫁ぎに行けるレベルだと自負しているよ！

「ブライアンもいたら良かったけどいないみたいだし食べちゃ……」

んあ？校内放送？

『トワイライトアサヒさん。秋川理事長が呼びびです。理事長室までお越しください。重要なお話ですので、大至急。お願いします。』

「ええー!?今からご飯なのにー!エアグルーヴの度肝を抜いた反応が見れるところだったのに!」

「理事長室……先輩何をやらかしたんですか」

心当たりなんてないけどなあ……ゴルシと一緒に学園の敷地内に畑作ったこととか?それともこの前の休日にオグリと一緒に街のバイキング食べ尽くしたこととか?

でも理事長に呼ばれるほどではないよなあ……

「いや、私は心当たりがある」

「え!ドルフ何か聞いてるの!」

「まあ、理事長も痺れを切らしたということだろう。大丈夫、悪いようにはならないさ」

ホントかなあ?嫌な予感しかしないんだけど……

「じゃあ大至急って言われちゃってるし行ってくる!先に食べていいよ!感想よろしくね!」

「ああ、ありがたかったですよ」

はあ、足が重いなあ……



「会長。それで心当たりというのとは？」

「ふふ。すぐに私達にも知らされるさ。まあさつき言った悪いようにはならないというのも、私にとってはの話だけだね」

「……？」

昼休みも終わりに近付き、生徒が授業の準備をし始める頃……

理事長室から

絶叫が

鳴り響いた。

問題児とトレーナー（候補）達



皆さんこんにちは。いつの間にか退学の危機に直面していて、知らない間にトウインクルシリーズに出ることが決定していました。トウイライトアサヒでございます。

どゆこと??色々と説明されたけどアサヒよくわかんにやい!

トウインクルシリーズについてはよく知ってる。よくテレビで見るやつだ。ルドルフもそれに出て大変世間を賑わせていたし、個人的なお祝いパーティーもした。つまり私もテレビデビューしないといけない……ってコト!?

まあ要は部活に入って良い結果を残して、退学を帳消しにしろってことだよね……それなんてアニメですか?まさか現実でそんなことになるうとは流石の私もビックリだよ。

でもなんで陸上競技なんだ……別にサッカーとかバスケとかやりたいわけじゃないけど、せめて入る部活は選ばせてあげようっていう姿勢くらい見せてくれても良くない?

しかも理事長いわく

「申し訳ないがトレーナーは自分で見つけ出して欲しい！ 退学になりかけているところをレースで取り返すという言わば救済措置なのに、何から何までこちらで用意しては他の生徒に鼻頂だと言われかねん！」

ということで指導してくれるヒトも自分で探さないといけないらしい。でもこれについては心配いらぬの！ 心当たりはもうついてるからね！

「頼もー！ー！！」

「……何か用かしら？」

そう！このお方こそ我が盟友ルドルフのトレーナー、そしてトレセン学園最強のチーム・リギル（なんかカツコイイ）のトレーナーなのである！ここに入れば勝つる！第3部完！

「弟子にしてもらいに来ました!!」

……？

なんかめっちゃザワついてる。あーしまったな。流石に練習中に乗り込むのは迷惑だったかも。トレーニングしてたウマ娘達も手を止めちゃってるし、リギルのトレーナー（おハナさんってルドルフが呼んでた）も怪訝な顔をしてる……これ第一印象ミスっちゃったかも！

「一応聞くけどなんの弟子かしら？」

「トウインクルシリーズの！です！」

なんかもつとザワザワし始めた!?やばい！そうだ、よく考えたらテレビに出るくらい有名な競技なんだから、こんなトーシロがいきなりプロのところに来たら舐めてると思われちゃう!?

「……なるほど。ついに貴方がね……でも非常に残念だけどお断りさせてもらうわ。ただでさえルドルフやブライアンもいるのに成り行きで貴方まで取ったら流石に周りに文句言われるもの」

「……つまり定員オーバー的な？」

「まあそう捉えてもらって構わないわ」

しよ、しよんなあああああ

!!!!?



ぬぐぐ……まさか定員数なんてものがあつたとは……まあ最強チームだもんね？そりゃいっぱい入部希望者来まくるわなつて……。

どうしよ。もう知ってるヒトおらんで……ただでさえ良い結果が残せるかわからな
いのにレースに出ることなく退学なんてバッドエンドすぎるよ！

「おー？アサヒパイセンじゃん！どうしたんだよこんなとこで」

「あ、ゴルシ」

なんか変な乗り物に乗って現れたのはゴールドシップ。放課後によく一緒に遊ぶ仲
だ。あ、そういえばゴルシも何かのチーム入ってなかったっけ？

「実はさ、私レースに出なきやいけなくなっただけどトレーナーがいなくてさ。1人
だけ心当たりあったけど玉碎しちやって……」

「ええー!?パイセンついにレース出んのかよ！わかった！そういうことなら任せとけ！
うちのトレーナー紹介してやるよ！」

「ホント!?やつぱり持つべきものはゴルシだよ！」

やったあ！紹介してくれるってことは定員数もオツケーだろうし、これでバッドエン
ド回避だね！

「つて……なんでジリジリ近寄ってくるのかな？」

「誰かを連れてくる時はこうしなきやならねえってアタシのシックスセンスが言っ
てん……パイセンはその第1号だぜえー!!」

「ぬわー……!!」

や、やられる！ぐっ！ここは逃げるんだよオー！！

「あつー！待て！逃がさねえぞ……つて、ちえ……パイセンにや追いつけねえか。んー、やっぱもう1人2人くらいはいねえとパイセン捕まえんのはキツイな。まずはどっかから後輩とつ捕まえて人数揃えねえとな」

はあ……はあ……っ！

……なんで私逃げたんだろ。

「はあ……もう疲れちゃったし、今日は諦めて帰ろ。よく考えたらいつまでに見つけろとか言われてないし」



理事長室での絶叫から1週間ほど経った頃、アサヒはトレーナー探しを完全に放棄していた。

知ってるトレーナーがリギルにしかいなかったため、諦めきれずにいたアサヒは、遠目から練習風景を観察していた。そもそもトレーニングってどんなことするのかと気

になったというのもある。そしてそれがトレーナー探しを放棄した原因でもある。

結論から言うともうとんでもなく厳しかった。生き物のやるトレーニングじゃねえよ……と膝が震えた。なんだあのバカでかいタイヤ……ウマ娘の身体能力がヒトとは次元が違うことはわかっていたがそれでも戦慄した。

ガクガク震えていると、通りがかった男に足を触られたが即座に蹴り飛ばし「こ、こんなところにいるのか!!私に帰らせてもらう!!」と倒れた男が何かを言う前に走り去っていったのだった。

そして、そんな件のトレーナー達はとあるバーで飲んでいた。

「あの足に蹴られてよく無事だったわね……」

「ま、いいトモ触らせてもらった代償ってやつだ。それに蹴られるのは慣れてるしな」
リギルのトレーナー東条ハナとゴルシの所属しているスピカのトレーナーである。ちなみに足を触ってきたトレーナーがゴルシの紹介しようとしたトレーナーだとアサヒは微塵も思っていない。

「タフねホント。それにしても、学園中で話題になってるわね。彼女のこと」

「そりゃ中等部の頃の模擬レース、あれを知らない中央のトレーナーはいないからな。ビデオがトレーナー間で出回ってるくらいだ」

「あの子、誰が担当するのかしら」

「俺が……と言いたいところだが、彼女はチームというより、専属のトレーナーがいた方が力を発揮できる気がするんだよな」

「それには同感ね。大体、あれほどクセのある子を見ながら他の子もなんて頭がパンクしちゃうもの」

「違うない」

こうして夜は更けていく……

結局、退学告知されてから1ヶ月、退学になると言われる前と同じように遊び呆けていたアサヒは理事長室に連行され、説教された後に、中央に所属しているトレーナーの最低限の情報（名前やトレーナーとしての実績程度のもの）と顔写真が貼られたプロフィールの一覧をその場で渡され、泣きながらトレーナーを決めたのだった。

流石に甘やかしすぎでは？とはたづなの談である。

問題児とトレーナー（真）



ウマ娘がトレーニンングを行うために様々な最新器具が取り揃えられているトレセン学園のトレーニンングルーム。不本意にも説教に負けて泣きながらトレーナーを決めた私は覚悟を決めてここに来た。

こい！巨大なタイヤだろうが！何百キロのバーベルだろうが！受けてたつてやろうじゃないの！

「お、来たか」

ふむふむ。写真で見た通りのメガネのさわやか青年って感じですなあ。これは間違いないく理論派タイプですね！スパルタ熱血スポ根というよりデータで攻めていくタイプ。無駄なトレーニンングはさせずに効率を目指すトレーナー……間違いないね！

「じゃあ自己紹介といこうか。俺が今日から君を担当することになったトレーナーだ。君のことは理事長から聞いていますよ。なんでも、トウインクルシリーズで良い結果を残さないで退学になるそうじゃないか」

「あ、トワイライトアサヒです。よろしくお願いします！いやあ、私としてもよくここま
で追い詰められたもんだと思いますよ……てかその話、もしかしてみんな知ってるん
ですか？」

「いや正式に知ってるのは俺とたづなさん、理事長だけだろう。あとは君が自ら教えた
友人等がいればその子達もだ」

「あー、じゃあ知れ渡ってるわけじゃないですね。私が話したのもルドルフだけなんで」
エアグルーヴに知られたらと思うと胃がキュツ！ってなるわ。もう鬼の形相で勉強
させられそうだよ……

「まあ実情を知らないだけで君がレースに出るということ自体は殆どの者が把握して
るだろうけどな」

それはそうか。リギルに凸ったりしたもんね。

「さて、話はこれくらいにして早速トレーニングを始めようか！」
「……………うす」

ついに始まるのか……さらば、放課後の憩いの一時達よ……

お世話になってる食べ放題のお店も、通ってるゲームセンターも、何もせずに晩ご飯
の時間まで爆睡してる時間も、河川敷でのファル子ちゃんのステージも、タキオンとの
実験も、愛を込めて育てた農作物も、もう……帰ってこないやなって……

「レースプラン等も組み立てたいところだが、君の実力をちゃんと見ないことには何も始まらない。ま、今回は能力の測定だけだと思って気楽にやってくれ」

いや、私はここで生まれ変わるっ！常時なまけ癖？そんなことはもう言わせん！

なつてやろうじゃないか！最強のウマ娘つてやつに!!!

「よろしくお願ひします!!!」

「……………」

「なるほど……大体分かった。今日はこのくらいにしておこう。じゃあ、身体を冷やさないように軽くクールダウンと、後はしっかりと柔軟してから帰るんだぞ」

いきてる？わたしいきてる？

ウマ娘つてこんなこと毎日やってるの……？む、無理だあ……私に最強のウマ娘なんて1億光年早かったんだあ……

ぐ……！う、動けん……このアサヒが目眩に吐き気……だとツ！

くそつ、それにしてもおかしいだろ……ウマ娘つて普通に2トンのバーベルとか持ち上げられるもんなのか……私には無理だったけど、やらされたつてことはそういうこと

なんだろう……ウマ娘の中でも私は非力な部類だったらしい。

あとなにあのリストバンドと靴……重すぎでしょ……あの薄さと大きさであの重さつてもうブラックホールだよ……1つにつき50キロ？ドラゴンボールの修行かな？

ていうかトレーナーも記録つけながら隣で同じことしてたんですけど、流石にトレーナーの付けてた重りは軽いヤツだよな？……ね？

い、いや！そんなことよりさあ！こんなの毎日続くのお……？無理だよ！無理無理カタツムリだよお！

やると言ってしまったからにはやらなきゃいけない？……くくくつ！マヌケが！そんな責任感なんぞこのアサヒには存在しないツ！！逃げてやる！私は逃げてやるぞトレーナーアアアアツツ！！！！



今日は放課後にトレーナー室に集合らしいけど行きません！アレだよ！ストライク？つてやつだよ！

そんなわけで生徒会室でルドルフとお喋りして帰ろ！

「ルードルフ♡……ってあれ？いないじゃん」

「ん？なんだアサヒさんか」

そこにいたのはナリタブライアン！ナリタブライアンじゃないか！久しぶりに会った気がするよ！

「ブライアンだけなの？なんか珍しいね」

「留守番だ。会長に何か用なら座るか？しばらくすれば戻ってくると思うが」

ふーん。だったら待たせてもらおっかな。今日の予定はなんにもないからめっちゃ暇だし。なんにも予定もないからね!!（重要）

「……そういえばアサヒさん、トウインクルシリーズ出走するんだってな」

「やっぱりみんな知ってるんだね」

「まあ中央に来たばかりの奴らならともかく、アサヒさんの事を知ってる奴はみんな聞いているだろうな。今年のジュニア、クラシックと時期が被ってるウマ娘はお気の毒だなんて言われてるくらいだ」

「へ、へえー……凄い注目されてるんだね？」

ちよ、ちよっと期待が重くないかい？なんで何年か前に1回みんなの前で走ったくらいしかレースの経験無いのに最強候補みたいな感じになっちゃってるの……

これさ、もし仮にこのままトレーニングサボってメイクデビューとやらを走って普通に負けたらヤバいんじゃないの？未勝利戦とかいうのもあるらしいし、最初はお試しみたいな感じで軽くね！とか思ってたんだけど……。

「まあ私としてはハナから負けを認めてるように聞こえて気に食わないがな」

「そ、そうだよねえ？全然勝てる可能性だってあるよね！みんな私の何倍も努力してるんだし！」

「……それ、他の奴には言うなよ。煽ってるように聞こえる」

「う、嘘お!？」

言葉そのままの意味ですけど!?!どこに煽り要素があるんですかブライアンさん!?

「ふふ、普段と比べて随分と口数が多いじゃないかブライアン」

「………会長」

……ルドルフおかえりーと言いたるところなんだけど、ルドルフの後ろに昨日みたことのあるヒトがいらっしゃるのはどういうことなのかしら……??

「君もアサヒを待ち望んでいた1人、ということかな」

「ふん……そんなことより、その後ろの奴は誰だ」

「アサヒを迎えに来たそうだ」

窓から逃げろ!!そこしかルートは無いが、逆に絶対に逃げれる唯一のルートでもある

!!

「甘いな」

「ぐえええっ!?!」

「すまないシンボルドルフさん。手間をかけさせた」

「あ、ああ……気にしないでくれ。ここにいるだろうと思つて案内しただけだし、私も戻るつもりだったからね」

「そうか。じゃあ失礼するよ」

「バカなツ！生徒会室の扉から私の座つていたところまで数mはあつたツ！座つている体制からの走り出しだったから最速とまでは言えなかったが、エアグリーブに見られたら確実に説教される速さで窓に向かったはずだ……」

「なのに何故私は今トレーナーに首根っこを掴まれて引き摺られているんだ!?! ルドルフやブライアンなら……いや、ウマ娘なら百歩譲つて対応出来たでしょう。しかしこう言つてはなんだがただのヒトに捕まるなんてありえん!! こいつ新手のスタンド使いか!?!」

「そうだアサヒ。これが今日の練習メニューだ。このまま運んでやるからその間に見とけ」

「あ、はい」

プールが閉まるまでひたすら泳ぐ

「あの、これしか書いてないんですけど……」

「昨日は単純な筋力しかみてなかったからな。本当はトレーナー室で昨日の結果について色々説明するつもりだったが、時間もないしそれはまた今度だ。今日はどれだけスタミナがあるのかを見させてもらおうよ。大丈夫だ。俺も一緒に泳ぐ！」

「い、いやだあああああああ
!!!!!!」

問題児と模擬レースの約束（強制）



あれから数ヶ月経ちましたが筋トレとか体幹とかそんなのしかやってません……トワイライトアサヒです。

あれえ？私レースに出るために部活やることになったのではなかったのですか？

「……何ヶ月か君と共にトレーニングをしてきたわけだが……はつきり言う君にはとてもない才能がある」

「そ、そうなの？いやあそう言われると照れますなあ」

「まあ自覚してないだろうとは思っていたが……でだ。そんな君にも弱点と言うか欠点がある」

「それを直せば最強ってことかな！」

「概ね間違いではない。そしてその欠点とは……」

私に走りの才能があつたとはねえ……しかも1つの欠点を直せば最強だなんて！煽てられたら調子に乗っちゃうよ!? テレビに出てウハウハのモテまくりになっちゃうと

「こ夢に見ちやうよ!？」

「根性がないことだ」

「へ？」

「君は何かをやってみようという一歩を踏み出すことは何も考えてないからか臆せずやってみせるが、少し失敗したり嫌なことがあったりしただけですぐに逃げ出す癖がある。臆病とは慎重ともとれるがレースの際にはあまりあつていいものではないのは確かだ」

「ええー？私ほど勇敢なウマ娘もいないと思うけどな！」

「じゃあなぜ君を捕獲しないとトレーニングが始まらないんだ？」

「お、おほほほ」

「こ、根性で……昔のスポ根漫画みたいなことを言いよる……根性なんていらなくてしょ！仮にステータスにそんな欄があったら確実に死にステになってるランキング一位だよ！」

「だが安心してくれ。その欠点を克服……いや、矯正するメニューは考えてある」

「根性を付けるトレーニングってこと？……なんか嫌な予感するんだけど」

「筋トレ、タイヤ引き、坂路ダッシュ……全てを極限までこなすんだ。特に筋トレだな！

筋トレは全てのネガティブ思考を排除してくれる最高のトレーニングだ！」

「何それえー！やだやだあ！せめてもっとレースみたいに走ったりしようよ！」
「知らん！」

「なにさそれえ!!大体高校生の部活にしては厳しすぎやしませんかね?」

ウマ娘用にアレンジされてるんだろうけど、それでも厳しすぎるよ!小学校の頃のクラブはもつとゆるゆる〜って感じだったぞ!

「部活……部活?……アサヒ、そういえば聞いてなかったんだが君はなんでトレセン学園に入ったんだ?」

「そりやウマ娘だし当然じゃん。まあトレセンって言っても色んなところにあっただけど、ここが1番家から近かったしさー。まあ後から寮生活って気付いてあんまり意味なかったけど……」

急にそんなこと聞いてどうしたんだろ?

「……………あつ、なるほど。いやただの興味本位だよ。ちなみに最近の学校はどこもかしこもこれくらいは厳しいもんだぞ!!」

「え、マジでえ?」

むむむ……時代は私を置いてスポ根物語が日常になってしまったんだね……くそお!スポ根反乱軍は私だけだぞ!というのか!?

「むしろ……はめちやくちや緩い方だ!ほれ行くぞ!」

「そんなにやああああ!!」

このあとめちやくちや筋トレした。



「で、何故当然のように生徒会室にいるんですか……」

「ホントだよ！アサヒは生徒会の一員じゃないでしょー！」

いやー、やっぱり生徒会室は落ち着きますなあ……第2の実家と言っても過言ではないね。

あ、ちなみにだけど今日はサボりに来てないからね！トレーナーに用事があるから自主練って言われたから、生徒会室でコミュニケーションする力を上げるトレーニングするだけなのだ！

「それティオーもじゃん」

「ふふーん！ボクはカイチョーからちちゃんと許可を貰って来てるんだから！ねっ！カイチョー！」

「もう用は済んでるから出てもいいんだがな。むしろ早く出る」

「もー！エアグルーヴは堅いんだから！」

ちなみにテイオーは転校生の校内案内を頼まれたところらしい。いや、頼まれたならさっさと行つた方が良いのではなからうか……

「アサヒとテイオーが揃うところも一段と賑やかになるな」

「会長は甘いんです……」

「で、アサヒはどうしたんだ？」

おつとなんだかルドルフの目が鋭い気がするよー？

「いや、今日オフだから遊びに来ただけですわよ。うん」

「嘘だな」

秒でバレてる……

「だつてさー、うちのトレーナー根性付けるーとか言つて筋トレばつかさせてくるんだもーん！せめて併走トレーニングみたいなものしたいよー！」

「先輩の口から併走という言葉が出るとは……」

「そりゃね！併走はルドルフとしたことあるから知ってるもん！中等部の頃の話だけど」

エアグルーヴは私をなんだと思つてるのかな!?確かに練習とか勉強とかサボりま

くっってるけど流石にわかるよ……まあルドルフとやってなかったら一生知らなかったかも shouldn't けど

「カイチョーと併走トレーニング?! いいなー! ボクもしてみたい!」

「ルドルフは忙しいからダメだよーん! お子ちゃまはもつと同学年と遊びなさいな」

「もう! アサヒはカイチョーのなんなのさ!」

「唯一無二の大親友だよ! ねっ! ルドルフ!」

「面と向かってそう言われると些か照れるが……そうだな」

ドヤヤヤヤ! ティオーはルドルフがとつても目にかけてる後輩だし、憧れの人とか師匠とかそういう方向には持つてこれるかもしれないけど、こういう気の知れた仲にはなれないでしょ! 羨ましいかにやー?? おーっほっほっほ!

「ムキキキ!! 前から思ってたけど、アサヒはカイチョーと仲良すぎなんだよね! いい加減この無敵のティオーの方がカイチョーに相応しいってところ見せてあげるよ!」

「やる気かね?? 私が本気を出したらこの星がもたないぞよ?」

「何言ってるのさ! アサヒはトレーニングだって最近始めたばかりじゃん! 流石に負けないよ!」

「負けないって言っても向こうは中学生よ? 余裕でしょ! いくらルドルフに目をかけられてるから、つて……」

「そうだよ！ルドルフが目をかけてるくらいだからテイオーって普通に強いでしょ！はっ！今トレーナーの言っていた何も考えずに一歩を踏み出すというやつをやるうとしてた……!?!いやあ危なかった！急に冷静になったわ！ふっふっふ……私も成長してるというわけよね！」

「ここは戦略的撤退つてやつをしよう！よく考えたら模擬レースなんて面倒くささの極みだよ！私の成績にいつさい関係ないし！」

「い、いやー、まあ冗談はさて置いてさ……」

「先輩が非公式とはいえレースですか……わかりました。こちらで申請しておきますので……テイオー。この日で大丈夫か？」

「ちようど空いてるしオツケー！」

「ふふ……アサヒが走るところを見るのは随分と久しぶりだ。私も楽しみにしているよ」

「え、あの勝手に話進めないで頂けませんでしょうか……ところでエアグルーヴさん？私の予定は聞かないの……あつ、貴方はいつでも暇だろうって？いやいや、私もトレーナーが付きましたからね！暇って訳にはいかないのよ！」

「ん？ああ、君のトレーナーには今連絡しておいたから安心してくれ」

「あ、うん。今トレーナーのこと気にしたもんね。流石親友！考えてることが伝わって

るって言うか以心伝心ってやつですわ！

……あれ!? 私はさつき戦略的撤退を選択したはずでは!? どんどん逃げ道が無くなってるよ!?! 一番肝心なところが以心伝心してないよ!?!

「ここらでカイチヨのパートナーとしての上下関係をはつきりさせようじゃん!」

「そもそも会長関係なく先輩の方が立場的には上なのだがな」

「もう! エアグルーヴはいちいち入ってこないでよ!」

みーんな乗り気だねえ……いつもだったらこういうバ鹿騒ぎってエアグルーヴが止めてるのにね? おかしいね。誰と誰が走るんだっけ? トウカイテイオーと、トワイライトアサヒ? ふーん! 2人とも頑張ってるねっ!

……これ下手に負けたら一生テイオーに小バ鹿にされるやつだよねえ。

降りたー! ーい!!!!!!

シンボリルドルフ



それはシンボリルドルフとトワイライトアサヒがまだ友達とも言えないくらいに関係性だった頃……

「ぜんっぜん点数上がりませーん!!」

「すまない。私の教え方が悪いのかもしれないな」

アサヒは補習の危機に陥っていた。もうすぐ始まる期末テスト。直近の小テストが見るも無残な点数になっていたことに危機感を覚えたアサヒは、同じクラスにいた凄く優秀そうなオーラを放ちまくるルドルフに目を付けたのだった。

「いやいや！ルドルフさんは悪くないって！多分私の物覚えが極端に悪いだけだよお！」

「しかしこれでは補習は免れないな……」

テストも近いということで放課後のトレーニングも軽めのもが多くなっていたことからルドルフはアサヒの頼みを快く承した。しかしどう教えようにも上手くないか

ない。見たところ真面目に話を聞いているように見える……が、どうも話が右から左に流れてしまっている気がするのだ。

何度かルドルフのピックアップした問題集をやらせても成果はイマイチ。どうしたものかと考え込んでみると、勉強に飽きたのかアサヒのお喋りが始まった。

「ねね、ルドルフさんってテレビでよく出てるよね？ トウインクルシリーズってやつ」

「そうだが……そういえば君が走っているところは見たことがないな」

「私はそういうの無理だもん。そりゃ小学校の頃の徒競走は負け知らずだったけどねえ……でもさ、こう『うおー！ トレーニングだアー！ 目標に向かって特訓特訓！ 勝ちを指して頑張るぞー！』みたいなのはあんまり好きじゃないっていうか……」

「なるほど。まあ誰にでも得意不得意はあるものだ。ウマ娘の目指すべき幸せが必ずしも走ることも限らない……ということかな」

そう言いながらもルドルフは疑問を抱いていた。トレセン学園には入学しながらも走ることにないウマ娘は少数だが確かにいる。しかしそれには必ず事情があるものだ。足に爆弾を抱えていたり、精神的なものだったり。

そして極論、そもそも走る気がないのであればトレセン学園に入る必要は無いのだ。普通のヒトも通う一般的な学校に入学すればいい。

一方彼女はどうかだろう。言い分を素直に受け取るのであれば、精神的な事情というの

が当てはまるのだろうか、そういった様子は見られない。何より入試の際の実技における適性検査……彼女はそれで私とほぼ同じ数値を出していると聞いているのだ。足の爆弾だったり、不安定な精神状態だったりするウマ娘の成績ではないだろう。

「目指すべき幸せ……」

「私の夢なんだ。すべてのウマ娘が幸福になれる……そんな時代を作るのが」

「……スゴい!!なんかカッコいいね!ヒーローみたい!」

目を輝かせながら、まるで戦隊ヒーローを応援する子どものように無邪気な顔はさつきまでの疑問が一瞬で吹き飛ぶほどに、綺麗な笑顔だと思った。

「ふふっ、あははは!」

「ええ!?今笑うところだったかな!」

「いや、すまない!なんでもないんだ」

なんかカッコいい……か。周りの大人からの冷めた、そんなの無理だと口には出さずとも一歩引いた視線。子どもが何を言っているんだというバ鹿にしたような視線。そんなものはいくらでも見てきた。きつと素直に称賛してくれる彼女は、この夢の険しさをミミリも理解していないのだろう。

でも……いやだからこそだろうか。純真無垢なその目に、心から応援してくれていることを疑わせないその雰囲気、自分が決して表面には出さなかった荒れた心を解きほ

ぐされたのだ。

「ねえねえ！気分転換にさ、ちよつと走らない？ずつと座つてて私はもう我慢の限界ですぞー！」

「ああ……そうだな！」

勉強が嫌いで努力も苦手。良くも悪くも子どもの様な彼女は、他の生徒や先生から見たら模範とはかけ離れた存在だろう。

それでもその姿は、自分には持っていないものをまざまざと見せつけてくるようである。シンボリルドルフには……とても眩しく映った。



「なんでこんなことになってるの……？」

「すまない。おハナさん……私のトレーナーに見られたのがまずかったな……」

最初は軽いランニングだった。座りっぱなしで凝り固まった身体を解したら、また勉強を再開する予定だったのだ。しかし運悪く本当に偶然、ルドルフの所属しているチームのトレーナーにその現場を発見されてしまった。

(ふふ、あのトワイライトアサヒの走りをようやく見ることができるとわね。理事長が絶対中央から離すなどまで言った彼女の實力……見させてもらおうじゃない)

「ねえ、ルドルフさんのトレーナー、ビデオカメラ持ってニヤニヤしてない……？ 本当に大丈夫かな……」

「私もあんなおハナさんを見るのは初めてだ……」

だが、内心笑みを浮かべているのはルドルフも同じだった。ついさつきまで疑問に思っていたことがこんなにすぐ解消されることになるとは思ってもなかったのだ。

形式としては併走トレーニング、距離は2000。東条はアサヒにルドルフと同じように同じペースで走ってくれば良いと言っている。しかしルドルフには本気で走れとも言っている。レースの経験値としてはルドルフの方が完全に上なため、ルドルフが勝つのはわかっている。

でも知りたいのだ。理事長が太鼓判を押した、中央の宝。まともなトレーニングも一切していない彼女がどこまで食らいつくのかを。

「何……これ……!?!」

才能があることは知っていた。だから途中まではルドルフに付いていけても、割かし

早い段階で失速するだろうと思っていたのだ。

「まるでルドルフが2人ね……っ！」

同じように走れとは言った。しかし蓋を開けてみたらどうか……寸分たがわず、2人目のシンボリルドルフかのように走れとは言っていない。最初は少し後ろを走っているだけだった。しかしレースが中盤に差し掛かる頃には走行フォーム、テンポ、重心の取り方。全てが瓜二つになっていたのだ。

「いや、冷静になりなさい……あそこまで完璧に模倣できるのは確かに凄いわ。でもそれじゃあ勝つことはできない」

走りながらルドルフも考えていた。

(これは才能があるなんてものじゃないな……)

最初に全身穴が空く程観察されている感覚があり、それが徐々になくなると同時に言いようもない悪寒……異世界に放り込まれたような錯覚に一瞬陥った。

それは黄昏。物の怪が現世に姿を現す逢魔が時。知覚した時には隣に『シンボリルドルフ』がいた。

(傍から見たらトワイライトアサヒが私と同じように走っているように見えるのだろう

な。まったく……それどころじゃない……これはまさしく私が走っている……！ふふ、ドツベルゲンガーに出会うというのはこういうことを言うのだろうか）

ただ体力の消耗は凄まじく大きい。ラストスパート、1番の踏ん張りどころで……
「ぐっ……はっ！はあっ！」

（失速……だろうな。しかし私も先達と比べればまだまだだが、それでも長い研鑽を積んできたつもりだ。そこにこうも簡単に到達されてしまうとは……立つ瀬がないな）

こうしてトレニングという名の真剣勝負はルドルフの勝利に終わった。

「も、もうっ……む、り、イー……！」

「大丈夫か？」

「ルドルフさあん！トレニングじゃない！これっ！トレニングじゃない！」

「君が凄すぎてつい力が入ってしまったんだ」

「す、凄いやうへへ。ま、まあ？やればできる子なんで……」

「あそこまでトレースされるとはね。それにレース中特有の領域に入ることも出来る……トウインクルシリーズに出てくれれば、必ず名を刻むことができるのだが」

「マジスカ……でも私、何も考えてなかったから……ルドルフさんみたいについて言われ

たから、いつそルドルフさんになり切ろうと思って……」

「……恐ろしいな」

（色が着いていないからこそ出来る芸当なのかもしれない。朝日のように周りを照らす純粹さと、昼と夜の狭間に揺蕩う幻影のような走り……面白くなりそうだ）



こうして現時点でのアサヒの唯一のレースは終わった。

この現場を見たのは東条ハナだけだったが、片手に持っていたビデオカメラのデータは伝説の模擬レースとして瞬く間にトレーナーの間に伝わった。

しかし、今のルドルフの圧倒的存在すら他のウマ娘のモチベーションの低下に繋がっている現状でこんなものを担当には見せられないということで、トレーナー間だけの流通に留まった。

ちなみにこのデータを見て一番興奮していたのは、いずれ理事長に就任することになる秋川やよいだったという。

「ル、ルドルフさん……立てない……」

「さんは要らないよ。アサヒ」

一方アサヒは1週間全身の痛みが取れずテストは赤点を取った。

あれほど無茶苦茶に体を酷使したのに筋肉痛だけで済んでいる所を見て、ルドルフの中で更に評価が上がるも、アサヒには自由にそのままのアサヒでいてほしいということ、レースに出てくれたらと思いつながらにもレースに誘うことは無かった。

余談だが、アサヒに対する対応が激甘になったのもこの頃からである。

問題児の敗北



「で、なにか申し開きはあるか？」

「え、えーと……」

「自主練をサボり、レースはまださせないと言っていたにも関わらずレースの約束を勝手にして、尚且つそれに負けたことに對する言い訳はあるかと聞いているんだが？」

「私もしたかったわけじゃないんだよお……しかもトレーナーも許可したってルドルフが……」

「はあ……あんなのほぼ事後承諾みたいなもんだろうが。まあもういい。相手を聞いた時点で君が負けることは正直分かっていたからな」

「わかってたんだ……じゃあもう正座は……」

「それは許さん」

どうも。絶賛正座で怒られてるトワイライトアサヒです。なんで正座してるのかと
言うとそのはもう皆さんお察しですね。

半ば強制的に模擬レースをする事になったあの日から数日後、逃げることも出来ずに結局レース出ることになったんだけど……

「わーい！勝った勝った！やっぱりワガハイは無敵のテイオー様なのだー！」

「くっ！殺せっ！」

負けました！

普通に負けたわ！あれー？なんだかんだで勝てる流れじゃなかった？

「最初はビックリしちゃったけど途中からダメダメだったじゃん！やっぱりトレーニングが足りてないんじゃないのー？」

「ぬぐぐ！中坊のくせに生意気な！」

くうく！完全にバ鹿にされてますよこれは！

いや、でもテイオーの言う通り最初はかなり良さげだったんだけどねえ。どんな感じで走ってるんだろって前のテイオー見てたら変な感じになっちゃった。

「アサヒ、テイオー」

「あ！カイチョー！ねえねえ！見てた見てた！？ボク勝ったよー！！」

「ああ、素晴らしい走りだった」

嬉しそうにしょってえ……！ふ、普通に悔しい……強いんだろかなとは思ってたけどさー！いや、私の物語はまだ始まったばかりというか、まだスタート地点なんですけどね！ね！

「アサヒ」

「うードルドルフ……まさか後輩にコテンパンにされるなんて思ってたよー……なんとなく嫌な予感してたけど」

「よしよし。それで、なんでテイオーに勝てなかったかわかるか？」

え、普通に実力で負けたんじゃないの？でもこう聞いてきたってことは理由があつて負けたってことだよな？

………わからん！

「『テイオー』に引つ張られ過ぎだ」

「会長。それは一体？」

あ、エアグルーヴも来た。っていうかゴルシにゴルシのチームメイトとかも野次ウマしてるじゃん！他にもちよこちよこ見知った顔がいる……意外と注目されてたんだ。

「テイオー、最初走っていた時どうだった」

「どうって言われても……あつ、なんかね、アサヒじゃないみたいだった！スゴい気迫があつて、これはボクも本気出さなきゃな！って思ったんだよ」

本気とか出さなくてもいいのに……むしろ油断してくれよー!!

「でも途中からなんでか段々走りが悪くなつてさ。怪我でもしたのかなーってちよつと心配しちゃうくらいには変わっちゃってたよ」

ええー!?! そんなに変わってたかな!?! 変な感じはしたけど怪我を心配されるレベルでだつたんだ!?!

うーむ……これは確かに実力の話ではないのかも……

「つまりはそういうことさ。後はアサヒのトレーナーに任せよう」

「えー? カイチョー、もったいぶらないで教えてよー!」

「私から言うのもお節介だからな。テイオー達も今度のアサヒのデビュー戦を見たら理解するさ」

私のトレーナーはちゃんとわかつてるんだね。もしかしてトレーナーがレースはしないって言うてたのはそれと関係あるのかな?

……もしかしてテイオーとレースってマズかった? い、いや、ほんとにダメならちゃんと止めるでしょ! 大丈夫! 怒られない!

「あ、そういえばアサヒってまだデビューもしてないんだっけ……カイチョーの同級生なのに」

「そういうテイオーだつてまだトレーナーもいないでしょ」

「いや、アサヒのはもうボクとは別次元じゃん……」

思い出したら泣きたくなくなってきた……うう、これからテイオーに煽られ続ける生活を歩まないといけないのか……！

「とりあえず結論から言うが、君は器用なようで器用ではないということだ」

「どゆこと?」

……どゆこと?」

「君がまともに走ったのはシンボリルドルフとのレースだけだろう? あそこで君は自然とシンボリルドルフの走りを身につけた。今回も最初はその走りをしていたんだ。だからトウカイテイオーも本気になった」

まあ確かにルドルフの走りをしていたのだとすれば、そりやもう速いだろうな。あんまし自覚ないんだけどね。

「でも途中でダメになっちゃったよ?」

「そこがキモなんだ。レース中トウカイテイオーが走る姿、君は走りながら観察してただろ」

「だって気になるじゃん。どんな感じなんだろうーって」

「そのせいだ」

「テイオー見てたのがダメ……ってコト!？」

でもレース中に相手を観察して状況判断することも大切だーってリギルのトレーナーが言つてたのになあ。別に私に言つてた訳じゃなくて、そう指導してるのを聞いただけだ。

「君は相手を見てその走りを模倣することが出来るほどに器用……だが、『同時』に模倣出来るほど器用ではないんだ。最初にルドルフの走りをしていたのに、テイオーの走りを観察したせいで無意識にその真似をしてしまった……だからテンポが噛み合わず速度が急激に落ちた」

「ええー？普通2つ取り入れたら合体して最強じゃん」

「それが出来なかったから負けたんだろ？ビデオを見たが見事にお互いの良いところを打ち消し合つた走りをしてた」

まあそう都合良くはいかないのか……でもルドルフの走りなんて自覚してやつてる訳じゃないのに、意識して続けるなんて尚更無理だと思ふんだけど。

……ていうか、1つのことしか出来ないってなんかバ鹿っぽいじゃないですかやだー！

「しかも本番のレースなんて更にウマ娘が多いんだ。2人3人と見てたら頭がパンクし

て走りどころではなくなるだろう」

「じゃあ勝てないじゃん!」

「ま、対策というか、克服するための課題は用意してある。デビュー戦までに課題をクリアすればひとまずは大丈夫だろう」

お、てことはメニューも変わって筋トレ地獄から開放されるということかな!?!明らかに筋トレでどうにかできる話じゃないでしょコレ。

「ん? ああ安心したまえ。筋トレしながら出来る課題だからな。」

……え。

「むしろ本当は意図は隠し、今のメニューと並行して徐々に新しいメニューを増やすつもりだったんだ。しかし、こうやって問題が露呈してしまっただけは隠す必要もないから説明したというわけ」

上げて落とすとはこういうことを言うのか! やだやだ! 筋トレやだ! ……ぐえ!

「やはり逃げる前にさっさと捕まえるに限るな」

くっそお! 先手を取られると絶対捕まる! やっぱこのトレーナーおかし! 身体能力がおかしい!

「よし! 1に筋トレ2に筋トレ、3、4も筋トレ、5は筋トレだ!」

「やだあああああ!!! マッチョにされるうう!!」

問題児とスピカ



「2 + 4 は？」

「6！」

「1 3 + 3」

「……………1 6！」

「1 2 + 1 7」

「……………ツツ！」

「おい！2桁にしたくらいで躓くんじゃない！」

「だってえ！」

今トレナーとやっているのは以前言っていた私の弱点を克服するトレーニング。周りからは奇妙な目で見られているけど仕方ない。テイオーにやられっぱなしなのも嫌だし…………とか言ったらこっちに来るのはテイオーじゃないですか！

「算数しながら筋トレしてる…………どゆこと？」

「あつー！テイオーー！次は絶対勝つからね！」

「う、うん」

あれ……なんか今のやり取り熱血漫画の一場面みたいじゃなかった？嘘っ!?私、トレーナーの策略通りにスポ根ウマ娘になり始めてる!?

うう、これがトレーナー式筋トレ地獄の成果だというの……最早これは一種の洗脳なのではないだろうかとトワイライトアサヒちゃんは疑いをかけそうだよ……。

「……落ち込んでないかなってちよつと様子見に来ただけど全然平気そうだね」

「あー、別によく考えたら非公式戦だったら別に（退学かどうかに）影響ないじゃん？だからいいかって。もちろん負けたのが気にならないわけじゃないけどね！」

「実際の（トウインクルシリーズの）成績自体が良ければいいってこと？確かにそうだけど……アサヒって意外とリアル思考なんだ」

そりやリアル思考にもなるよ……こっちは退学かかってるんだからね！模擬レースで負けたくらいで退学が近付いたら流石の私も猛抗議ですよ！

「……っていうか、こういうのって勝った側が慰めに来るのダメなやつじゃない？私は気にしないけど」

「そうかもだけど……結構悔しそうにしてたからさ。それにアサヒがトレーナーにレースはダメって言われてるって知らなかったんだもん。ボクが無理矢理誘っちゃったと

ころあるし……」

耳をしょんぼり垂れさせてなんだか反省してる感じのテイオー……全く可愛い後輩ですなあ！生意気言ってもそうやってすぐ反省出来るところがお姉さん大好きなんだよ！

「気にしてないって。まあ、トレーナーには怒られたけどね」

「う、ゴメン……」

うーん……いつまでもションボリテイオーなのも困っちゃうなあ。

「あ、そうだ。良かったら今度のデビュー戦見に来てよ」

「え？」

「ふっふっふ……テイオーと戦った時の私はまだ全力では無かったのだ。デビュー戦で真の力を貴様に見せてやるから、しかと目に焼き付けておくが良いぞ？」

「……あははっ！なにそれー？……うん、じゃあ見させてもらおうかなー」

おーおー、やっぱりウマ娘って笑ってるのが一番なんだよね！テイオーが落ち込んでるのは似合わないよ。

「ありがとねアサヒ！じゃ、ボクちよつとスピカのみんなにダンス教えに行かないとだからー！」

「うん、またねー……ダンス？」

……だんすをおしえにいく?!

「ほら、スピカのみんなウイニングライブ散々だったでしょ?そしたらカイチョーがウイニングライブを疎かにする者は学園の恥だーって」

「ト、トレーナー……?」

「……………行つてこい」

おい!!完全に忘れてたよね?!いや、私も忘れてたけど!そういえばありましたねえ!
!ライブ!!ぜんっぜんライブの練習してないじゃん!!ダンスって1週間かそこらで覚えられるものかな?!私、ルドルフに怒られたくないんだけど!!

「テ、テイオーさん」

「ん?どしたの?」

「私も連れてって♡」



「あー!テイオー!?!……と、この前テイオーに負けてた先輩!?!」

ちよつ！なんとという覚え方をしてるんだ！

「テイオーは俺が呼んだんだが……な、なんでアサヒがいるんだ……？」

「やーやー！スピカのトレーナーさん、私もダンスの練習交せてよ！」

「そ、それは構わないが……」

ひやつほい！これで学園の恥だなんて言われなくて済むぞー！ただでさえ退学になりかけてるのにライブで棒立ちしたら何言われるかわかったもんじやないって話よ！

「あー、とりあえずだな。自己紹介お願いしていいか？初対面のウマ娘もいるだろ？」

そういえば見たことない顔が1人いるね。流石に長いこと学園にいるだけあって大體顔はみんな見た事あったつもりだったけど……あ、あの子が転入生ってやつなのかな。

「どもども！君がウワサの転入生だね？私はトワイライトアサヒ！まだデビューもしていない新人なんで優しくしてねー！」

「よ、よろしくお願いします！スペシャルウィークです！」

「スペは日本一のウマ娘になるのが夢なんだろう？だったら絶対アサヒも大きな壁になるだろうな」

日本一のウマ娘！でっかい夢をお持ちなのね！スペシャルウィークって名前もいいね。そう！なんと言ってもスペシャルだからね、なんだか日本一にだってなれそうな気

がするよ。

「日本一！凄いな！夢は大きければ大きいほど叶え甲斐があるつてもんだよね！応援するよー！」

「あ、ありがとうございます！」

うーん、溢れるいい子オーラ……これは只者じゃないねえ。

「でかい壁って言ってもよ、先輩ってそんなにはえーのか？模擬レース見た感じそうでもなかったような……」

「ちよつと！先輩に失礼でしょ……まあアタシも気になってたけど」

えーと、あの子がウオッカで、その隣の子がダイワスカーレットだったかな。そういえばあの時のレース、スピカの人達みんないたつけ。ばつちり負けたところ見られてるんじゃない……悲しい。

「パイセンは相当はえーぞ？本気出しゃうちらなんて秒でごぼう抜きされるだろうな」
「……そうね。あの時のレースは以前の私みたいにとても走りづらそうにみえたから……本気を出せば凄いのかも」

んで、ゴルシにスズカ。スズカはエアグルーヴの友達だからちよこちよこ話したことはある。ホントにちよつとだけだけど。

「ごぼう抜き……じゃああの時は本気出してなかったんスね！弱く見せかけて本番で一

氣に度肝抜くつてことか……ちよつとカッケーかも」

「ゴルシ先輩がそこまで言うなんて相当なのね……」

「アサヒさん凄いですね！」

うう……普通に負けたなんて言えない！みんなの純粋な瞳が胸に刺さるよ……。

「ちよつとー！自己紹介もいいけどさー、早くダンスの練習しようよ！その為に来たんだよ？」

「そうだな！よし、今日はテイオーにダンスの指導をしてもらうから、お前らしつかりやるんだぞー！」

「おー……！」

「みつちりスパルタでやるから覚悟してよね！」

「ええ……！」

青春だなあ……私はチームに入ってるわけじゃないからこういうのは新鮮だよ。よし！練習なんて好きじゃないけど、みんなでやるダンスだったら楽しくできそうだよね！頑張ろう！

あ、スパルタは勘弁してください！



チーム・スピカ……いい雰囲気だったな。

「お、昨日はどうだったんだ？」

「みっちり詰め込まれたよ……完全に知らない踊りつてわけじゃなかったから言うほどボロボロじゃなかったけど。そういえば今更だけどトレーニングの途中に行つて良かったんだ？」

「俺らのトレーニングの趣旨はなんだったか覚えてるか？」

「えーと確か、複数の事を同時にしたり出来るようにすると、意識の切り替えをスムーズに出来るようにって話だったよね。身体は無意識に動かしつつ頭は別のことにあてて……みたいなの」

「そうだ。そう考えると今までのトレーニングと歌いながら踊ることは共通してるだろう？」

確かに……でも明らかに歌って踊るよりおかしなトレーニングさせられてたけどね！計算問題解きながら筋トレとか、ランニングマシーンに乗りながら全く違う操作性のゲームを2つ交互にやるとか、結構めちやくちやだと思うんだけど！

「ま、成果はデビュー戦でわかるさ。よし、今日のメニューを始めるぞ！」

「あいあいさー」

テイオーに実力を見せるって約束しちやっだし、昨日の帰りにスピカのみんなも見に来るって言ってたし、流石の私も真面目にやりますか！なんだかんだ負けるの嫌だって気持ちも湧いてきてるから！

次回！最強アサヒのメイクデビュー！なんてね！

トワイライトアサヒ



これは昔の記憶。

「あ、危なかった……！」

「負けちゃったあー！先生やっぱり速いね！」

幼きトワイライトアサヒと走っているのは小学校の担任の先生。

学生時代はトレセン学園に在籍しており、重賞レースで勝利したこともある優秀なウマ娘である。

「アサヒちゃんはきつとトレセン学園で凄いウマ娘になれるわねえ」

アサヒは昔から速かった。地域の子どもたち（ウマ娘も含む）が参加する徒競走ではいつも1番だったし、こうして先生と走る時もハンデなしの本気勝負である。

大人の意地かプライドか、先生が負けたことは1度もないが、大人に本気を出させている時点でその才能が伺える。

「え？私、マミちゃんと同じ中学校いこうかなって思ってたんだけど」

「ええ!?アサヒちゃんトレセン学園行かないの!？」

驚愕であった。走るのが好きで、嫌な顔ひとつもせず楽しそうにこうして自分とも走って、そんなのトレセン学園に入るとしか思えないだろう。

確かにクラブ活動なんかで何かを練習とか特訓めいたものは好きじゃないことは知っていたけど、まさかのまさかだった。

ちなみに、マミちゃんとは同じクラスの友達でウマ娘ではない普通のヒトである。

「マミちゃんにも驚かされたんだけど行った方がいいの?」

「貴方ほどのウマ娘ならトレセン学園一択よ!」

「そうなんだー!じゃあトレセン学園じゃなきやダメなんだね!頑張らないと!」

こうしてアサヒの進路は決定したのである。

「お、思ったより随分あっさりね?」

なんのドラマもなく、なんの面白もなく、ウマ娘はトレセン学園一択という一つの大きな勘違いを抱え、翌年トワイライトアサヒは学園の門戸を叩くことになる。



トワイライトアサヒとはトレセン学園においてどういう立ち位置にいるのか。

学園のトレーナーから見た彼女は端的に言えば『問題児』であった。

溢れんばかりの才能で中央の理事から高く評価されている栄誉あるウマ娘 理

事から直接スカウトを受けたという噂も立っていた そんな彼女はいつまで経つ

てもレースに出走しない。

選抜レースどころか走っているところもまともに見たことのないトレーナー達は最初こそ理事に直接スカウトを受けたという彼女……つまりは成功をほぼ約束されたウマ娘のトレーナーになろうと声をかけ続けた。それは同時期に入学したシンボリドルフと人気を二分する程であったが、彼女の返答は常にNOであった。

いつまでも首を縦に振らないウマ娘にいつまでも構っていられるほどトレーナーも暇ではない。徐々に声をかける人間はいなくなり、理事からスカウトを受けたという話も、所詮は噂だったかと殆どのトレーナーが目を向けなくなっていくた。

それからしばらく時が経ち、アサヒの話など一欠片もなくなったある日のこと。

見事シンボリドルフを獲得し、破竹の勢いでその強さを見せつけていたチームリギル……そのトレーナーである東条ハナが普段からは考えられない様子で同じビデオを繰り返し見ている姿が目撃された。

シンボリドルフとトワイライトアサヒの模擬レースである。

このビデオは学園の関係者達を大いに驚愕させた。

結果として勝利したのはルドルフだったが、その差は2バ身。なんのトレーニングも積んでいないウマ娘である。噂は本当だったのだとトレーナーは否が応でも思い知らされたのだ。

しかし、彼女は走らない。まさに宝の持ち腐れとしか言いようのないそのウマ娘を、学園関係者達は問題児として扱うようになった。

なお、そう扱われるようになるにつれて本当に問題行動が多くなり始めたのは、そのような雰囲気を感じ取ったからかもしれないとは駿川たづなの談である。

一方、ウマ娘から見た彼女はどうかなのか。

第一線で活躍しているウマ娘達からすれば、これもまた『問題児』だろう。

学園のトレーナー達のように走れば凄いのだろうから走ればいいのにとヤキモキしているし、勝負してみたいと思う好戦的なウマ娘もいる。

しかし、第一線で活躍しているスターウマ娘など全体で見れば僅か数%であり、殆どのウマ娘からの評価は違った。

トワイライトアサヒは『不発弾』

いつ爆発するかわからない爆弾。メイクデビューを過ぎたウマ娘達から恐れられる時限式の爆弾。それがアサヒである。

「なんで！なんでよりによってアタシが走るときにデビューするのよッ！」

既にジュニア級など通り越しているアサヒの走るデビュー戦は必然的に未勝利戦となる。つまりアサヒ以外はメイクデビューで敗れたウマ娘が出走するのだ。

ここで負ければもう終わり……なんてことはないが、十分追い詰められた立場にいるウマ娘達は気が気ではない。

トレーナー達はルドルフとのレース模様を意図的に隠しているが、人の口には戸が立てられないと言ったもので、どこかからあの皇帝と互角だという噂は流れてくる。

なにより、同じ場所で寝泊まりしているのだ。そんな噂がなくとも彼女の力の片鱗は身近に感じられる。

遅刻しそうになった時、女帝に追いかけられている時、そんなバ鹿みたいなシチュエーションでも十分に速いのだ。そもそも生徒会が彼女を捕まえるのに苦労している段階で察せない方がおかしいのである。

そんな彼女がたまたま自分と同じタイミングでたまたま同じレースに出走？ 勘弁してほしいと思うのも無理はない。

「やる気がないならずっと走らないでいいじゃない！それを気まぐれみたい……！ア

ナタがいなきやアタシが勝つてたのに！」

一度負けたウマ娘のメンタルは非常に脆い。このレースに出るウマ娘はなにせスタートから躓いてしまっているのだ。

だから祈っていた。どうかやる気にならないでくれと。

だから願っていた。だから触れないようにしていた。せめて、自分とは関係ないレースでデビューしてほしいと。

トウカイテイオーに負けた？それがなんの慰めになるのだろうか。だから実は大したことないんだと思えるほど、現実を直視できないわけじゃない。

次があるから大丈夫？最初の村に魔王が直々にやってきて、それで心が折れないようになんてそんなの無茶に決まってるのだ。

「負けない……！アナタより何百倍も努力してきたんだ！少し前まで遊び惚けてた奴になんて負けてたまるもんか！」

それでも己を奮い立たせる。負けることを許容できるほどスポーツマンとして腐っているつもりはないのだから。

そして

『1番人気トワイライトアサヒ！これは圧倒的！圧倒的です！完全な独走状態！』
『か、勝ったのはトワイライトアサヒ！他を全く寄せ付けず、大差でゴール！全てをなぎ倒し、悠々とデビューを果たしましたッ！』

魔王はすべてを蹂躪した。